

個を生かす学校環境の在り方
—学校教育目標による具現化を求めて—

秋田県教育センター 指導主事 柴田正臣

1. 研究の趣旨

環境は教育そのものであるとさえいわれており、児童生徒は環境のかかわりの中で成長発達をとげる。昭和62年8月臨教審は「個性重視の原則」を提言した。学習指導要領の改訂を受けて学校現場には「個を生かす指導」の具現化が強く求められている。

先の岩手県大会において、共同研究推進委員会は、学校環境を5つにとらえ、4つの視点から検討すべきことを提言している。この中の精神・心理的環境にかかわるものとして次の仮説を設定した。

2. 研究仮説

教育目標を調査することによって県内の小・中・高等学校の「個を生かすための学校環境」への取り組み状況を察知し（1年次）、次に目標に基づく教育活動の実践例をとらえて（2年次）、検討、吟味を重ねるならば（3年次）、「個を生かすための学校環境の在り方」について具体的に提言することができるだろう。

3. 調査の内容と結果（小・中・（高））

(1) 学校教育目標の中にどのような価値項目が多いか。

ア 学校教育目標

①心情の豊かさ ②不屈・克己心 ③健康 ④自主・自発性 ⑤基礎学力

イ 教師個人の教育目標

①心情の豊かさ ②自主・自発性 ③基礎学力 ④責任感 ⑤創造性

・ア、イとも個（個性）にかかわる価値項目の取り上げはない。

(2) 学校教育目標に対する教師の意識

ア 教師間の共通理解について

イ 自校の教育目標と個人の教育目標の関係

(3) 学校教育目標の改訂状況

(4) 学校教育目標具現化の場と手だて

(5) 学校教育目標と「学校教育の指針」（県教育委員会発行）との整合性

4. まとめ

個にかかわるものを、全教師の共通理解に基づいて、より行動目標化して学校教育目標に取り上げる必要がある。